

連載
26

植物の方言〈みぞそば〉



ミソソバ〔たで科〕
道端の水辺などに群生している1年
草。高さ30～70センチメートル。花
は、夏から秋にかけて咲く。

名とともに多くの方が教えて下さったのが、「渋柿をさわす(渋を抜く)のに使う」ということでした。藁とみぞそばを煮出したお湯に渋柿を漬けてむと渋が抜けるそう、小松ではそうした利用法とともにこの草の名が伝えられてきたのです。

市内全域に多彩なギャルグサ類の方言形分布

市内のほぼ全域で聞かれる方言形がギャルグサの類です。小松では、〈蛙〉の方言形がギャルからギャワズ、そして共通語形のカエルへと変化する中で、ギャルは〈おたまじゃくし〉とみぞそばの方言形の中に生き残ったのです。ただ、〈おたまじゃくし〉の場合と同様、ギャルの意味が不明になった結果、ギャルグサは多くの集落でギャログサ、ギャリグサ、ギャレグサ、さらにギャがジャに変化したジャログサ、ジャリグサ、ジャレグサなどと呼ばれています。

また、「ギャルグサも花盛り(それほど美しくない女性も年頃になって美しく見えるようになった)」といった、この草に関

する比喻表現も所々で聞くことができました。ギャルグサ類のほかには、金平糖のような花の色・形に注目したコンペートバナ類が点々と、花の咲く季節に注目したらしいハサカケバナ(稲を稲架にかけける咲く花の意)も千代・平面・梯町で聞かれました。

〈みぞそば〉と〈蛙〉はなぜ結びついたのか

〈みぞそば〉という標準和名は「溝のよな湿地に生える蕎麦のような草」という特徴から名づけられたものと思われ、小松ではこの草がなぜ〈蛙〉の方言と結びついたのでしょうか。小松では「蛙がいそがな湿地に生えるから」との説明を時々聞きましたが、『日本方言大辞典』(小学館)には、「蛙を釣るところから」との説明もあります。どちらかが正しいのか、それとも別の理由があるのか、今のところはまだはつきりわかりません。

と考えるとよいでしょう。

家庭によって呼び方に違いもー

ジージ、ジージーが一般的な家庭での呼び方であるのに対して、それらよりも少し良い、丁寧な呼び方の代表形がオジジです。郷谷川中・下流域、大杉谷川流域、梯川下流域、そして海岸部の集落で多く聞かれました。逆にジージ、ジージーより親しみをこめた、あるいは少し悪い呼び方とされるものにジ(市内全域)、ジンジ(郷谷川・滓上川流域)、ジ(丸山、中ノ峠など)、ジ(マ)などがあります。このうちジーサは、その分布域と、呼び方が卑称化していることを考え合わせると、小松で聞かれた〈お祖父さん〉の呼び方の中では古い形だろうと予想しています。

もの名前などと異なり、家族の呼び方は、同じ集落内でも家庭によって違うことがあるのです。

連載
27

家族の呼び方の方言
〈お祖父さん〉



孫「ジージ」。
祖父「ジージじゃないつ、あんちゃんやぞお(笑い)」。
内孫の仁義くん、力くんを両うでに、ジージじゃないと… 竹中義兼さん(茶屋町)

今月から数回にわたり、小松での家族の呼び方(家庭内で家族に直接呼びかけるとき)の言い方の方言をご紹介します。今回の〈お祖父さん〉を皮切りに、順次〈お祖母さん〉〈お父さん〉〈お母さん〉〈お兄さん〉〈お姉さん〉の呼び方を取り上げていきたいと思えます。

方言の共通語化が進む中でも、家庭内での家族に対する呼び方の世界は、とり

わけ共通語化が進んでいるようです。最近では、全国どここの家庭でも、〈お祖父さん〉はオジーちゃん、〈お祖母さん〉はオバーちゃん、〈お父さん〉はオトサンかパパ、〈お母さん〉はオカーサンかママ、お兄さんはおニーちゃん、〈お姉さん〉はオネーちゃんといった呼び方がされる時代になりました。しかし、かつては、そんな家族の呼び方の世界でも、全国各地に様々な方言形が聞かれました。日本中で同じような呼び方しか聞けなくなってきたのを寂しく思うのは筆者だけでしょうか。

一般的な呼び方はジージジー

市内の広い範囲で聞かれた〈お祖父さん〉の呼び方の代表的な方言形はジージ、ジージーです。ジージとジージーは後ろのジが短く発音されるか、長く発音されるかという微妙な違いで、同じ集落で両方の形を聞くこともあり、それぞれに特定の分布領域をもつわけでもありません。小松の一般的な家庭での〈お祖父さん〉の呼び方がジージ、またはジージであった

連載
28家族の呼び方の方言
〈お祖母さん〉ボランティアで老人会や障害者の人に手芸を教えるのが生きがいというハッスルおばあちゃん。
石本まつさん(島町)

さて、読者の皆さんの家では「お祖母さん」をどう呼んでいらっしゃるでしょうか。おそらく、ほとんどの方はオバーちゃんとお答えになるのではないのでしょうか。前回も触れたとおり、家族の呼び方の世界は急速に共通語化が進み、全国的に同じような呼び方がされる時代になりました。しかし、かつては全国各地に様々な呼び方が聞かれ、旧来の社会構造の中では、時にそうした呼び方が家の格の違いを表すような場合もあったのです。今回は「お

祖父さん」に続いて、小松市内での「お祖母さん」の呼び方の方言(70歳前後の方々がかつて使っていた)をご紹介します。

ジージ、ジージーに対してバーバ、バーバ

小松での「お祖父さん」の一般的な呼び方はジージ、ジージーでしたが、「お祖母さん」の呼び方もそれらの形に呼応するように、バーバ、バーバが市内の広い範囲で聞かれました。バーバは南部地区でやや多く聞かれたものの、分布の広さからはバーバの方が小松の代表的な呼び方だったと言えます。

ほかには、オババが郷谷川中・下流域、大杉谷川流域、梯川下流域、旧小松町域、海岸部の集落、バーバの下路形バー、そしてパンバが全域、バーサが大日川上流部の丸山、湊上川上流部の中ノ峠、鍋谷川流域の河田館で聞かれました。これらは、それぞれ「お祖父さん」の呼び方で聞かれたオジジ、ジー、ジンジ、ジーサに対応するものです。

丁寧さの異なる複数の呼び方が併存

ところで、こうした家族の呼び方の場合、一つの集落で複数の形が併存していることがあります。「お祖母さん」の呼び方の場合、そこにはどのような違いがあるのでしょうか。具体例を少し見ることにしましょう。

例えば海岸部の安宅では、バーちゃんやオババは良い家での、バーバは一般的な家での、バーはより親しみを込めての呼び方とのことでした。また、郷谷川流域の波佐羅では、オババは最も良い、バーバ、バーバーは一般的で親しみを込めた、バーはややぞんざいな感じ、バサ、パンバは最も悪い呼び方との説明を聞きました。

かつての家の格のようなものの反映も含めて、同じ集落内でも家によって様々な呼び方がされていたことを感じ取っていただけるのではないのでしょうか。

連載
29家族の呼び方の方言
〈お父さん〉「お父さん好き?」「ううん、きらいつ!」「えっ!!」。
今江達夫さん(龍助町)、真人君(7歳)、綾子ちゃん(6歳)、健人君(4歳)

前回までの「お祖父さん」〈お祖母さん〉に続いて、今月は、家庭内での「お父さん」の呼び方について見ることにします。これまで同様、昨年夏までに終えた小松市全域(105集落)での言語地理学的調査(70歳前後の方々を対象とした)の結果からご紹介します。

オトーサン、ババ以前には実に多くの呼び方

〈お父さん〉の呼び方には「お祖父さん」

「お祖母さん」の呼び方以上に多くの方言形が聞かれました。同じ集落内でも家によって様々な呼び方がされたことに加えて「お祖父さん」〈お祖母さん〉に比べて使用頻度が高いこと、などによるものかもしれません。

小松市内の広い範囲に聞かれた「お父さん」の呼び方の代表は、トート類(トート、トートー、トト、ト)とツーツ類(ツーツ、ツーツー、ツ)です。

トート類は、大杉谷川と湊上川の上流域を除く市内のほぼ全域で聞かれ、ツーツ類に比べて新しい呼び方で良い呼び方だと教えて下さる方が多かったように思います。それに対して、ツーツ類は一般的な家庭での呼び方として、トート類に次いで市内の広い範囲で聞かれました。

分布域はやや限られますが、トート類よりも良い呼び方としてオトー類(オトー、オットー、オトト)も聞かれました。オトー、オットーは湊上川流域の一部とそれに続く梯川流域、オトトは大杉谷川上流域、日本海沿岸部、旧小松町域の南、南部の日用川流域の一部で使われたように

す。

小松のママは「お母さん」ではなく「お父さん」

「お父さん」の呼び方には、ほかに「ママ」という形も聞かれました。トート類、ツーツ類よりも良い呼び方で、しかも古い形のようなです。郷谷川中・下流域、大杉谷川下流域、湊上川、梯川流域、日用川流域を含む南部地区で聞かれ、分布からはママが元の形で、その後ママが生まれたようです。今やママと言えば当然「お母さん」のことですが、これらの地域ではママと呼ぶと、何と「お父さん」が返事をしたわけです。

郷谷川流域ではオツツア、オトツツア、また、旧小松町域ではオトツツアンのほかにオトーサン、オトーちゃん、トーちゃんという形も聞かれました。町部ではいち早く、オトーサンに代表されるような新しい呼び方が行われていたことがわかります。

連載 30 家族の呼び方の方言 <お母さん>



5人の子持ち、はつらつ母さん 勝木緑さん(写真手前・龍助町) 子育てがやっと一段落。今は家業に打ち込む毎日。 目下、母親業は休業してまーす。

お母さん、雪の降る夜に私を生んで下さってありがとう。もうすぐ雪です。(傍点筆者)

今や全国的に有名になった、お隣福井県丸岡町の「筆啓上賞」。右のものは、第一回「日本一短い『母』への手紙」の「筆啓上賞」受賞作品の一つです。もちろん、冒頭での母への呼びかけは「お母さん」となっています。というわけで、今月は前回

の〈お父さん〉に続いて、〈お母さん〉の呼び方を見ていきます。

急速に共通語化が進んでいる家族の呼び方の世界。しかし、前回までにご紹介したように、小松市内に限っても、以前は、実に多彩な呼び方が存在していたのです。若い読者の皆さんは、あまりに多いその呼び方のバリエーションに驚かれたのではないのでしょうか。

呼び方でも〈お父さん〉と対をなす〈お母さん〉

〈お祖父さん〉とお祖母さんの呼び方が、ジージ⇩バーバ、オジジ⇩オババのように形態的に対をなすことが多かったように、〈お母さん〉の呼び方も〈お父さん〉と対をなす形が多く聞かれました。

〈お父さん〉で市内の広い範囲に聞かれたトート類と対をなすのが、カー力類(カーカ、カーカー、カー)とオツカー類(オツカー、オツカ)。カー力類は郷谷川中流域、大杉谷川流域、湊上川流域、加賀市に近い日用上流部付近を除いた比較的広い範囲に、一方、オツカー類は郷谷川流

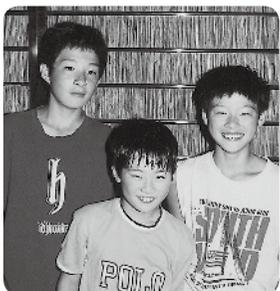
域とその西の大杉谷川中・下流域、そして南部地区にまとまって分布します。同様に〈お父さん〉で広い範囲で聞かれたツーツ類と対をなすのがヤーヤ類(ヤーヤ、ヤーヤー、ヤー)で、ツーツ類と同じように、北の湊上川・鍋谷川・梯川流域で聞かれました。

古い呼び方ほど丁寧さが下がる傾向

中ではヤーヤ類が古く、次いでオツカー類、そしてカー力類の順に新しくなるようです。言葉は使い古されるほど意味(丁寧さ)が下降する傾向があると言われますが、三つの呼び方が併存している集落では、カー力が最もよい呼び方で、オツカー、ヤーヤの順に丁寧さが下がる傾向が確認できました。

ほかには、旧小松町域でカーちゃん、オツカサン、オカーサンなどの新しい呼び方が、珍しいところで、安宅新町でジャーマ、日末・串でジャサ(ー)、月津でジャー、ジャーサ、大杉谷川上流部の大杉町でアンカ、アンニヤといった呼び方も聞かれました。

連載 31 家族の呼び方の方言 <お兄さん>



左から北本一朗くん、翔吾くん、大地くんの3兄弟(千代町)。野球したり、ゲームしたりと仲良しです。

先月までに、小松での四つの家族呼称(直接呼びかけるときの呼び方)の方言をご紹介します。今月はさらに一世代下がった〈お兄さん〉の呼び方を取り上げます。

〈お兄さん〉の場合は、だれもがその呼び方をするわけではありません。筆者福井県武生市出身も兄がいまませんでしたので、自身の方言の中での兄の呼び方とは、弟が私に向かって呼んでいたアンちゃんでした。

一方、家庭によって兄は一人とは限らず例えば兄が二人以上いる場合など、そ

の下の弟や妹が上二人の兄を呼ぶ場合や、親がそれらの息子を呼ぶ場合に、長兄と次兄で呼び方を変えることもあったようです。かつて、長子相続が尊重された時代、同じ兄でも長兄と次兄以下では、ある格差が存在していたのです。それが呼び方の違いにも反映していたと考えることができます。

アンカ、アンマが代表形ーアンカからアンマへ

小松市内で〈お兄さん〉の呼び方として聞かれたものの代表は、アンカとアンマでした。一つの集落で両方の呼び方が聞かれることもありましたが、大きな傾向としてはアンカは湊上川流域、鍋谷川流域、郷谷川流域、大杉谷川流域、浜佐美本町以南の日本海沿岸部、日用川流域を含む南部地区を中心に分布し、アンマはそれら以外の梯川流域、郷谷川下流域、大杉谷川下流域を中心に分布しています。市内の地図を思い浮かべていただくと、アンカがアンマを取り囲むように分布していることがわかります。分布の様子から、

アンカの方が古く、後にアンマが使われるようになったのではないかと想像されます。アンカ、アンマの前部形式アンはア二(兄)に由来するものでしょう。

一般に新しい語形が早く受け入れられやすい市の中心部、旧小松町域では、アンカ、アンマはほとんど聞かれず、新しい呼び方のアンちゃんが使われています。

アンカ、アンマは石川県、富山県中心の呼び方

『日本方言大辞典』(小学館)によれば、アンカは富山・石川両県、福井県北部、京都府の一部、アンマは富山・石川両県、岐阜県北部、和歌山県の一部に分布の見える形です。全国的にも、石川・富山両県を中心とした地域の特徴的な呼び方であることがわかります。

ところで、アンカ、アンマという代表的な呼び方については、「長男だけの呼び方で、次男以下は名前前で呼んだ」といった説明を所々で聞きました。先にも述べたように、長男が特別扱いされていた事実を物語るものでしょう。

連載 32

家族の呼び方の方言
〈お姉さん〉



病院を訪れるおじいちゃん、おばあちゃんに、優しく「ニヤニヤ」って呼ばれてみたいですね(笑)。新しくミス小松になった市民病院看護婦 杉本麻衣子さん(矢田野町)

6月以来(へお祖父さん)を皮切りに、家族に直接呼びかけるときの呼び方の方言をご紹介します。今回はその最終回として(へお姉さん)の呼び方を取り上げます。

小松のニヤニヤは「娘嬢万頭」の「にや、あにや、あ」と同じ?

小松市内での(へお姉さん)の呼び方として全域にわたって聞かれた呼び方は、

ニヤニヤ、ニヤ(ニヤとも)です。ニヤニヤという形も聞かれないわけでは

ありませんが、最後が伸びて発音されないニヤニヤの方が圧倒的に多く聞かれました。ニヤニヤという呼び方で、小松からも遠くない山中温泉の名物「娘嬢万頭」を思い出す方もいらっしゃるでしょう。「娘嬢万頭」の説明書には、加賀の方言で(へ娘さん)の呼び方とあります。しかし、にや、あにや、あは本来(へ娘さん)の呼び方だったのでなく、家族の中の(へお姉さん)に呼びかけるときの呼び方であったものが、他家の(へ娘さん)の呼び方としても拡大使用されたものと思われま

す。こうした現象は、これまでに取り上げた家族呼称にも見られるもので、かつて村社会が親密な人間関係で結ばれていたことを反映するものでしょう。もちろん小松でも、他家の未婚の(へ娘さん)に対する呼称としても用いられます。

『日本方言大辞典』(小学館)によれば、(へお姉さん)(へ娘さん)の呼び方としてのニヤニヤの類は、(へお兄さん)の呼び方のアンカ、アンマ同様、全国的にも石川(加

賀地方)・富山(西部)両県を中心とした特徴的な呼び方のようです。

また、ニヤニヤとニヤニヤではニヤニヤの方がよい呼び方と意識されている(中海、八幡、若杉、東山、長崎、串、矢田、二ツ梨、滝ヶ原など)。「自分の姉はニヤニヤ、近所の年上の女性はニヤニヤと呼んだ」(岩淵)という説明も、そうした意識を反映したものでしょう。

アンニヤ、ネー、チョコ、そしてネーチャ、ネーサンも

ニヤニヤの類以外では、アンニヤが郷谷川流域、鍋谷川流域などでわずかに聞かれました。小松で(へ兄嫁)や(他家の若いお嫁さん)の呼び方として使われているアンニヤと関連がありそうです。ほかに、ネーも点々と聞かれました。珍しいところで、津上川最上流部中ノ峠ではチョコ(長女の呼び方)という形も聞かれました。また、(へお兄さん)の場合と同様、市の中心部、旧小松町域ではネーチャン、ネーサンという新しい呼び方が使われています。

連載 33

〈男の子〉の方言



やんちゃでかわいい3人トリオ(太谷幼稚園で)

今月で20世紀最後の年もいよいよ終わりとなります。街にはクリスマス音楽や装飾があふれています。来たる新世紀が、次代を担う子どもたちにとって、明るく希望に満ちたものであることを願わずにはいられません。

今月はその子どもたちの中から、(へ男の子)の方言をご紹介します。と、先月までの家族の呼び方のように、直接呼

びかける時の言い方ではなく、話題の中で(へ男の子)のことをさして言う言及称をさします。例えば「やんちゃ(へ男の子)はやんちゃで困る」と言うような場合の(へ)内に入る言い方で、おおよそ小学生以下の男の子をさす言い方です。

一般的な言い方はポーとコワロ

旧小松町域の一部を除いて、市内のほぼ全域で聞かれた(へ男の子)の言い方はポーです。例えば「アノポー、イクツニナツタ(あの男の子は何歳になった。)」のように言います。ポーは「坊」の意でしょう。とくに良くも悪くもない、一般的な言い方として使われてきたようです。全国的にも、「坊」に由来すると思われる形は広い分布が見られます。また、ポーほどではないものの、「コワロ(コアロとも)」という言い方も広い範囲で聞かれました。「コワロ」は「小童」に由来するものと考えていますが、『日本方言大辞典』(小学館)によれば、小松をはじめ、石川・富山両県の一部にのみ分布する形です。

良い言い方にはタンチ、悪い言い方にはガキなどが

ポー、コワロに対して、(へ男の子)の良い言い方、悪い言い方を教えて下さった方もいらっしやいます。良家の(へ男の子)や、かわいい(へ男の子)などをさす良い言い方としてはタンチが代表的で、一部地域でボン、ボンボン、ボンチが、一方、悪い言い方としては、ガキ、ガキのほか、ポーの前に悪い意味の語がくっついた、ダラポー(はかな男の子)、「テッカポー(腕白坊主)、クソッタレポー、ヤンチャポー」などが聞かれました。

以上のほかにも、タンコ(河田館・本河田・古府・金平・津波倉、タンコボ(打越)、ボンタラ(沖)、ボンサ(谷内)、ボンコー(日末)、ボンコ(軽海・金野・金平・矢田野)、コボ(三谷)などの言い方が聞かれました。

自分は使わないけれど、小松にもこんなにたくさんの方の言い方があったんだと思いの方。あなたは今、(へ男の子)のことを何とおっしゃっているのでしょうか。

連載
34

〈女の子〉の方言



「メロ、メロンコ、それともタータ。近所のお年寄りには何て言われてるのかな。」
〈ひかり保育所〉

そ小学生以下の女の子をさすものです。

〈男の子〉に比べバラエティーの多い〈女の子〉の方言

〈男の子〉の方言では、市内の広い範囲でボー、コワロの二つの言い方が聞かれたのに対して、〈女の子〉では、市内でも、地域によっていくつかの方言形が一定の領域を占めながら分布していることがわかりました。

市内北部から見ていきますと、津上川流域では、上流部でチョコ、中・下流部でチヨ、チヨンコが聞かれました。チヨーは大杉谷川流域にもまとまった分布が見えます。津上川下流部から小松バイパスに沿った南側の地域(花坂・大野・三谷・本江など)にはチヨへの形も聞かれます。

鍋谷川流域から梯川流域ではタータが聞かれました。この地域で同時に聞かれたメロ、メロンコよりはタータの方が良い言い方ようです。

旧小松町域から日本海沿岸部では、タータのほか、メロンコ、コメロなども聞かれました。例えば、「アコノ タータ

オーキナンマシター(あそこのお嬢ちゃんは大きくなられました)」「寺町)のように言うとのことでした。

さらに南部地区ではメロ、メーロ、メロンコ、コメロのほか、チヨ、チヨンコ、そしてチーコ(津波倉・粟津などの多くの言い方が、そして、東部の郷谷川流域では、ネンネという言い方がまとまって聞かれました。

以上のような言い方のうち、チヨ、チヨンコやタータの語源は不明ですが、タータは石川・富山両県に特有の言い方です。良い言い方と意識されていることや、市内中心部にも聞かれることから、比較的新しい言い方かと思われるかもしれません。メロ、メーロは江戸期以降の文献にも登場する「女郎」に由来するもので、メロンコは「女郎の子」、コメロは「子女郎」の意でしょう。ネンネは「姉」と関係があるかとも思われますが、よくはわかりません。

それにしても、言及称の数でも、男の子は女の子にかなわないようです。頑張るまっし、男の子!

連載
35

〈お転婆〉の方言



21世紀は女の子の時代だよ!

手元の、ある国語辞典には、〈お転婆〉について「女性としてのたしなみを忘れてふざけさわぐ少女」と書いてあります。この記述からは、男の子は元気で強くなるべし、女の子はおとなしく控え目であるべしといった、かつての社会通念にもとづく差別意識を感じ取ることができるでしょう。しかし、最近のように、元気な女性たちのめざましい活躍ぶりが評価される時代となつては、このことばも、めつき

り使われることが少なくなってきたようです。

オテンバはオランダ語から?

ところで、〈お転婆〉は従来、「馴らすことのできない。負けん気」の意のオランダ語 Outenbar に由来するとの説が有力でした。しかし、『日本方言大辞典』(小学館)などで〈お転婆〉の方言の分布を見ると、語頭にオの付かないテンバの類が中国・九州地方に広く分布しており、オランダ語起源とすれば江戸も後期以降広まったと考えられるのに、なぜ東日本には分布が見えないのか、また、なぜオの付いた形が見えないのか、といった疑問が残ります。

バッチャメロが市内全域に

小松市内で70歳前後の高年層の方々から教えていただいた〈お転婆〉の方言の代表形はバッチャメロの類で、市内の全域で広く聞かれました。旧来の社会通念の中で生きてきた年輩の方々にとって、〈お転婆〉を意味するバッチャメロは今もなお使

用する、また、使用しないまでも記憶の中に鮮明に残っている言い方です。

バッチャメロのバッチャは「罰や」からでしょうか。憎らしい相手に「ぞまーみる」の気持ちを込めて言う、というバッチャ(五国寺)も関連がありそうです。メロは先月もご紹介した「女郎」に由来するもので、小松では女性への卑称として使われます。バッチャメロの類には、バッキヤメロ(北浅井)、バツシャメロ(五国寺・串茶屋)、ガツチャメロ(波佐羅・下牧)があり、下略形としてのバツチャ、バツシャ(丸山・金平・五国寺)も聞かれました。

共通語形オテンバももちろん聞かれましたが、ほかに、バツチャメロとは微妙にニュアンスを違えて使われていると思われる、オトコメロ、ヤンチャメロ、テッカメロなどの言い方も聞かれました。オトコメロ、ヤンチャメロはそれぞれ「男のような女の子」、「やんちゃな女の子」の意。テッカメロのテッカは「気質が荒い」の意の「鉄火」からで、「乱暴な女の子」といったニュアンスを持つようです。